

交差する時、引鉄は誰が引く

ベシ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

星の見る夢は現実を狂わせる。

交差する二つの世界に、

本来存在し得ない異物が交じる。

時の調停者と夢見る少女。

未来のない存在と過去のない存在。

運命の神は全てを嘲笑う。

それでも彼らは駆け抜ける。

いま、この瞬間を精一杯生きていく。

話を思いついたら投稿なので、次話まで2年とか普通普通
もう好き放題ですよ。

目次

序章へ向かうための序章	1
始まりの記憶 復讐よりも、家族の愛	3
はじまりは 潮風そよぐ アル二村	9
あしたの思い出 昨日の未来	14

序章へ向かうための序章

夏の、ある暑い日のこと。通っている大学は既に夏休みに入り、サークルの活動も無い。連絡の取れる友人たちは皆予定があつて都合がつかず、集まつて駄弁ることも出来ない。簡潔に言つてしまえば、私は暇を持って余していた。

家でおとなしくしているのは性に合わないもので、外に出ることにする。そういえば、少し前に電車に乗つてちよつと行つたところに大型のショッピングモールが出来たという話を皆がしていたようなよし、今日はそこで徹底的に暇を潰すことにしよう。

今日の収穫は大きかった。まさかあんなに美味しいコーヒーを出すお店が有るとは思いもしなかつたし、ショッピングだけでなく体を動かせるアミューズメント施設まで完備とは……、次は一人じやなくて、皆で来たいな。

日が暮れて来た。こういう施設としては、これからの時間がいよいよ書き入れ時なのだろうけど、私は十分満足したので帰ることにする。

駅で電車を待つ。無計画に来てしまったので時刻表を確認する。もう暫くは待たなければならぬようだ。少しだけ肩を落として印の前に並びなおす。こういう、行動と行動の合間、少しでも考えずに惚けていられる時間は、実のところ結構好ましかつた。だって、こんなに素敵な発見をさせてくれるのだから。

それは少女の形をしていた。夕焼けを浴びて更に輝く金色の髪に、それを纏めている紅のリボン。白くシンプルなワンピースは純粹で無垢な印象を与える。青空のような瞳は、距離を隔ててもなお吸い込まれそうな程に透き通っていた。

どうしてだろう、初めて見た筈なのに懐かしさが込み上げる。まるで、長い間共に旅をした仲間と再会したような感覚。少女はまだ此方に気付いていないようだ。いや、そもそも、ただ駅のホームで向かい合わせになつただけの初対面の人間に大きな印象を持つことが

稀なのか。

ふっ、と少女が顔を上げる。目が合った。ああ、どうしよう。胸が高鳴る。目を逸らせない。いや、違う。逸らしたくないのか。少女も、ただ私を見ている。

その時、向かいのホームに電車が入ってきた。邪魔だ。はやく行ってくれ。漸く発車する。やっとか、これでまた少女と交流できる。しかし、私の想いとは裏腹に再び視界に入った向かいのホームからは、少女の姿は消え去っていた。

なぜ、どうして。私の頭の中はそれで一杯だった。そうだ、向こうに行けば良いじゃないか。すっかり失念していた。全くこんな簡単なことも分からないとは、私も動揺していたようだ。真っ直ぐ歩き出す。そのまま、私は線路内に落ちた。落ちた体勢が悪かったのか、意識が朦朧としている。だが、そうだ、「向こう」に行かなければ。何やら大きな音がするが、些細な問題だ。次の瞬間、衝撃が体を襲い、私は意識を失った。

『全ては運命が導くのだ』

始まりの記憶 復讐よりも、家族の愛

物心がついた頃、私は孤児院にいた。

院の責任者、ルツカ・アシユティア博士（私たちはルツカ姉さんと呼ばされ……呼んでいる）によると、どうやら私は戦災孤児らしい。この孤児院には、そういった子供達が集まっていた。

かつてこの地では、ガルディアという王国が栄えていた。王は心の優しい人格者だったそうだ。王国の繁栄は永く続くと、誰もがそう思っていた。

けれどそれが実現することはなかった。

隣国であるパレポリは、虎視眈々と時期を窺っていた。

ガルディア王国の兵の練度が平和によつて段々と下がっていったのに対し、パレポリは兵を鍛え、武器を開発していき、いつしか軍事国家と呼ばれるようになっていった。

そして王国歴1005年、ついに彼らは動き出した。ガルディア王国に攻め込んだのだ。

王国に近代兵器に対抗する術はなく、あっさりとパレポリに征服、統合されてしまった。

その戦火の中でガルディア王は命を落としたのだという。

ルツカ姉さんは、今でもそのことを悔やんでいる。私には、私達には彼らに抗うだけの力があつたのに、と。

けれど、こうも言っていた。

「過去を悔やんでもしかたないわ。起きてしまったことは変えられない。今、出来ることをしなくちゃね」

私がこの言葉を忘れることは、きつとないだろう。その頃にはもう、前の世界に対する未練は無くなっていた。

ルツカ姉さんは、驚くことに世界を救ったことがあるという。その時に一緒に戦った仲間とは今でも交流があり、彼らが孤児院を訪れることもあった。

赤いツンツン頭が特徴のクロノさん。

金の長髪を後ろでまとめている快活な女性、マールさん。

この二人は夫婦だという。確かにとても似合っていると、そう思った。

他にも、そのまんまロボットのロボさんに、昔カエル男だったことがあるというグレンさん、なんだか原始的な格好をしているエイラさん。

クロノさんやマールさんほど頻繁に訪れることはなかったけど、彼らがやってくる時は孤児院のみんなが興奮していた。もちろん私もその一人だった。

彼らの話はどれも刺激的で、なかでもグレンさんが魔王と一騎打ちをした話が私のお気に入りだった。

そんな日々を過ごすうちに、私はある少女と親友と呼びあえる関係になっていった。

彼女の名は、キッド。

孤児院ができる前からルツカ姉さんに面倒を見てもらっていたという。

私達は、イタズラを仕掛けてはルツカ姉さんに叱られる、なんでもない日常を愛していた。

大きくなったらルツカ姉さんの手伝いをするんだ。二人でそう誓い合った。ずっとこんな毎日が続くんだと思っていた。あの日が、来るまでは。

「おい、ハジメ！起きろ！起きろって！ルツカ姉ちゃんがどっかに連れてかれちゃうよー！」

体を揺り動かす手の感触と必死な声で、私は目を覚ました。横を見ると、今にも泣きそうな顔をしたキッドが私を見つめていた。一体ど

うしたのだろう、そう思い、声をかけようとした。けれどそれは叶わなかった。耳を劈くほど大きな爆発音がしたから。

私は慌ててベッドから飛び起き、キッドと共に廊下に出ようと部屋のドアを開けた。真っ先に目に飛び込んできたのは赤い色だった。辺り一面が炎に包まれていた。

私が描いたグレンさんの絵も、キッドが描いたルツカ姉さんの絵も、全てが燃えていった。

けれど、何か感傷を抱いている暇などなかった。

キッドは言った、ルツカ姉さんが攫われてしまおう、と。

助けなきや。そう思った。頭の中にはそれしかなかった。

私はがむしやらになって探した。

腕が焼かれようと、肺が焦げ付こうと構わない。

そして、見つけた。

床に横たわるルツカ姉さんと、山猫の亜人、道化師の少女を。

「あ……うう、うああああああー！」

悲鳴が聞こえる。一体誰のものだろうか？

そして気付いた。

ああ、これは私のだ、と。

そう思った時にはすでに体が動いていた。

キッドは、ただ呆然とその場に立っているだけだった。けれど仕方ない。むしろそれが普通の反応だろう。

亜人と、道化師。彼らは客人として迎えられたはずだった。ルツカ

姉さんに話があるのだ、と。

ヤマネコと、ツクヨミ。それが彼らの名だったはずだ。

「ヤマネコオオおおー！」

怒りに任せて飛びかかった私は、しかしあっさりと一蹴されてしまった。

今になって考えてみれば、当然のことだ。190cmもある巨体に、たかだか12年ほど生きただけの女が敵うはずもない。背中から壁に叩きつけられた私は絶息し、動くことも出来なくなった。

はは、これはもう……ダメかな……。

諦め掛けたその時、私がやられたことで我に返ったのか、今度はキッドがヤマネコに食ってかかっていた。

ダメだよ、キッド……はやく、逃げて…。

今にも気を失ってしまいそうだった。

でも、キッドを助けなきや……。

そんな想いとは裏腹に体は指先まで動かない。

私には、どうすることも出来ない。

自分の情けなさに涙が溢れる。

誰か、誰でもいい……。助けてよ……！

そう願った瞬間だった。

大きな音を立て、ドアが蹴破られた。

飛び込んできたのは、赤いバンダナを巻いた少年だった。

その姿を見た途端、なぜか大きな安心感が私を包んだ。根拠はな

い。でも、彼なら助けてくれる。そう感じた。

少年はキッドの腕をつかんで引き留め、私をその背に乗せた。そし

て、少しヤマネコを睨み付けてから踵を返して孤児院を脱出した。

私は、彼の大きな背中に安心して気を失ってしまった。

気がついた時にはもう少年の姿はどこにもなく、そこには静かに涙を流しながら燃えていく孤児院を眺めているキッドがいた。

声をかけようとしたその時、キッドはこう呟いた。

「復讐ってやっぱりダメなことなのかな。頭では分かっている。でも、

あいつが憎いよ……。私の家族も、居場所も、全部奪っていったんだ

……。私は、どうすればいいのかな……」

その言葉を聞いた時、私は自分に誓った。

けっしてキッドを一人にしない、傷つけさせない、と。

私はキッドを抱きしめていた。

「ハジメ……。わたし、いや、俺は絶対にハジメを守るよ。だから、俺の前から、絶対に居なくならないでくれ……」

嬉しい。キッドも同じように考えてくれてたんだね。

「うん、わかった。私は、ずっとキッドと一緒にいる。私は、私を守る

キッドを守るよ」

こうして私達は歪な愛を誓い合った。

それから私達は生きていく為に何でもした。

初めは裕福そうな家に忍び込んで食べ物や少し拝借するくらいだったけど、だんだんとエスカレートして行つた。と言っても、悪い商売で稼いでいる奴らから金品を盗んで貧しい人たちに配る、義賊みたいなものだったけど。

そんな行為を繰り返して行くうちに、私達にラジカル・ドリーマーズという名前がつけられた。

そして、ラジカル・ドリーマーズの名は大陸中に広く知れ渡つてしまった。

だから、私達はゼナン大陸から離れることにした。

そして今は内海に浮かぶエルニド諸島へ向かう船の上で波に揺られてる。

エルニド諸島を選んだのには理由がある。

数日前、とある酒場に立ち寄つた時のことだ。

数人の商人たちが集まつて共に酒を飲んでいた。その話題の中に、こんなものがあったのだ。

「そーいやよ、3年くらい前まで不気味な野郎がいたの、お前ら覚えてるか？」

「それって、あの猫みたいな顔した旦那のことかい？」

「ああ、いたなあそんなやつ！羽振りはやかったから色々卸したりしてたけど、そうじゃなきゃ関わりたくなかつたぜ」

「そうそう、そいつなんだけどな？　なんか、また動き出してららしいぜ。まあこの辺りじゃなくて、エルニドってところらしいんだけどよ」

「エルニドかあ…」

「なんだ、てめえエルニドってどこ行ったことあんのか？」

「ああ、あそこはいいとこだぜ。テルミナのゾウイカスミのパスタは絶品だし、それ以外にも海産物は質が良いのばっかりだしよ、もうちよつと近けりや商船のラインを作りてえくらいだ。ああくそ、話してたら行きたくなくなっちゃったじゃねえか」

「旦那がそう言うんなら良いとこなんだろうな。旦那の物を見る目は確かだからよ」

結局、あの中で話してた一人が船を出すと言っていたので頼み込んで乗せてもらったと、そういうわけなのであった。

「ねえねえ、向こうに着いたらさ、まず何しよつか！テルミナのゾウイカスミのパスタは外せないでしょう？それから、風鳴きの岬からの景色も良いって聞いたしー、危ないって言ってたけどヒドラの沼も実は行ってみたいんだよね！　ねえ、キッドはどう思う？」

「おいおい、オレ達の目的は二の次かよ？　でもまあいろんなところ見て回りたいとは思うけどさ」

エルニド諸島。一体どんな所なんだろう？

私達の胸は、高鳴りっぱなしだった。

この先に、大きな困難が待ち受けていることも知らずに。

はじまりは 潮風そよぐ アル二村

夢を、みていた。

ボクと知らない女の子が出てくる、不思議な夢。夢の中身は、既にほとんど忘れてしまったけれど、一つだけ鮮明に覚えていることがあった。

その夢の中でボクは、その女の子を大振りのナイフで刺していたんだ。夢の中の出来事のはずなのに妙にリアルな感触が手に残っていた。

あれは、一体なんだったんだろう……

いくら考えても答えは出なくて、ひとしきり悩んだ後ボクはそれを忘れることにした。

あれは夢だったんだ、ただ内容がちよつとリアルだっただけだと、考えることにした。

太陽はすでに高く昇り、海を照らしていた。

そういえば、昨日レナがなんか言ってたっけ。トカゲのウロコがなんとかつ……て……

「ああっ!? しまった忘れてた!」

今日はみんなでトカゲのウロコでネックレスを作る約束をしてたんだ……

「うう、レナもシュウも怒ってるだろうなあ……」

慌てて着替えて一階に降りると、母さんが家事をする手を止めて呆れたように笑いながらこつちを見ていた。

「あら、ようやく起きたの? せっかくレナちゃんが起こしに来てくれたのにお前ったら、ぐっすり寝てたわね。ほら、女の子を待たせるもんじやないわよ?」

ああやつぱり……早く行かないとっ!

「母さん、行ってきます!」

「はいはい、気を付けてね」

外に飛び出したボクは一目散にレナの家を目指す。と言つてもすぐに隣なただけど。

「お邪魔します！」

声をかけて中に入って行ったけど、そこに居たのはレナのお婆さんだけだった。

「おや、セルジユじやないかい。一体どうしたんじや？ レナなら用事を言いつかって、ほれ、あの棧橋のところにおる。そういえば、昨夜はシユウと一緒に話しておったが、そのことかのう？」

お婆さんはにやにやと悪どい笑みを浮かべながら（これ絶対わかってやってるよ…）、レナの居場所を教えてくれた。

ボクはお婆さんに礼を言つて、今度は棧橋の方へ足を向ける。

「セルジユ兄ちゃん！」

と、不意に後ろから声がかげられた。

「聞いたよーレナ姉ちゃんとシユウ姉ちゃんとの約束すつぽかしたんだって？」

彼はウーナ。レナの弟だ。村の人たちの間で、彼は家ではレナとシユウの尻に敷かれているという噂がまことしやかに囁かれている。というか、実際そうだ。

そんな彼が、キラキラした目でボクを見ている。

例えて言うなら、誰も釣ることができなかった大物を釣り上げて帰ってきた英雄を見ているかのような、そんな目だった。

……なんとも切ない気分になってしまったけど、ボクも彼のことを笑うことはできない。なぜなら、ボクだって彼女たちに頭が上がるらないのだから……！

「いや、すつぽかしたというか、成り行き上そうなってしまったとか……」

なのでこんな情けない理由で彼をわくわくさせてしまって申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまった。

そんなボクに彼はさらに追い打ちをかけて来た。

「それでもだよ、うん。姉ちゃんたち手が早くておいらまいつてるんだよ。だから、これを機にセルジユ兄ちゃん、いっちよがつんと言つてやってよ！」

切実な訴えを聞いて、流石に無理だと言うことが出来ず、

「わかった、約束はできないけど、どうにかならないか言ってみる」
そう返したのだった。

「がんばってね、セルジュ兄ちゃん！ おいら応援してるからさ！陰ながら、ひっそりと、地道に……」

あはは……。ダメだったら、骨は拾ってね……。

ともかく、彼と別れて、僕は改めて棧橋へ向かうのだった。

棧橋には、海に飛び込んで遊ぶ村のちびっ子たちと彼らのお守をするレナがいた。

ゆっくり近付いていくと、向こうもこっちに気づいたんだろう、もともと無然としていた顔をさらに不機嫌そうにしてこっちを睨んできたのだった。すごいこわい。

でも、ここで躊躇ってたらもつと怖いことに……！

意を決して、ボクは彼女の方に足を踏み出した。

「あーら、ようやくお目覚め？」

ひいっ!?!ごめんよウーナ、やっぱりボクには無理みたいだよ……。

「セルジュ、貴方が寝坊したもんだから母さんから用事を言いつかつちやったじゃない。……ちよつと、聞いてる？」

こういう時は、下手に言い訳をするよりも素直に謝っておいた方が結果的に被害は少なくて済む。ボクの経験に基づく対処法だ。

「ごめん……。言い訳はしないよ、本当にごめん。二人とも楽しみにしてたのに……」

「む、そんな風に謝られたらもう怒れないじゃない……」

案の定、レナはそれ以上怒ることなく普段の機嫌に戻ってくれた。少し、無言の時間が流れる。

けれどそれは不快なものではなかった。

「おーい、セルジュ兄ちゃん！レナ姉ちゃん！」

僕たちにかげられたその声で、はっと我に返る。そっちをしてみる

と、バシャバシャと水音をたてて海で遊んでいたなかの1人がはじけるような笑顔でこつちを見ていた。

「兄ちゃんたちも一緒に泳ごうよ！」

そんな無邪気な誘いにふと笑みを漏らす。

レナも同じようだったけど、あいにくボク達（主にボク）に泳いでいる暇はなかった。

「バカなこと言わないの、あんたたちと違ってこつちは遊んでるわけじゃないんだから！ ……あんまり遠くへ行っちゃだめよ！」

「ほーい、りよーかーい！」

そう言うと、その子はまた輪の中に戻って行くのだった。

「まったく……、呑気でいいわよね、チビ助たちは」

確かにボクもそう思う。でも、ボク達にだってあんな時があっただ。だから、決して多くない子供でいられるこの時間を大切にしたいって、そう思うんだ。

「けど、わたし達にもあったよね、あんな頃」

レナも、同じことを考えてみたいだね。

「二日がすごく長くて、毎日が新しいことだらけでその全てが輝いて見えてた」

「うん、そうだね。ほんとに、毎日が楽しかった。今の日常も悪くはないけど、あの頃は、なんて言うか、とても良いものだったと思うよ」と、そこで遠い目をしていたレナがキリツと表情を改めて拳を握って前にかざしたかと思うと、

「けど、今大切なのは失った子供時代じゃなくてトカゲのネックレスなのだ！うん。過去よりも今を見据えて生きなくちゃ！」

思わずずっこけてしまいそうだった。

今はそんな空気じゃなかったはずなのに……！

「というわけで、シユウと一緒に先に行つてウロコを集めておいてね。シユウはキキのお父さんに手伝いを頼まれてたから、そこにいると思わうわ。そうね、本当は100枚くらいって言いたいけどそれじゃあんまりだから3枚くらいにしといてあげる。集め終わったらオパーサの浜で待つて、用事が済んだら私もすぐ行くから」

ちえつ、冗談じゃない…。

思わずそう言ってしまうそうになっただけど、そんなことをしたら血を見ることになるので素直に頷いておく。

「わかった、任せといてよー」

そう返すと、レナはうんうん、とうなずきながら、満足そうに微笑んでいた。

「そうそう、やっぱり素直が一番ね」

あーあ、ずっとそうしてれば可愛いのに。

ボクは口に出さずに心の中でそう呟くのだった。

さて、シユウがいるのはキキの家だったつけ。

それじゃあ早いとこ合流してトカゲ狩りに行きますか！

ボクはシユウを迎えに行くために栈橋を後にしたのだった。

あしたの思い出 昨日の未来

僕には記憶がない。

いや、この村に来る前までの記憶を思い出すことができないうつた方が正確かな。

まあ、どっちでも構わないだろう。

そう、僕はアルニ村での暮らし以前のことを、自分の名前ともう一つのことで以外思い出すことができない。

僕の名前はシユウ。

すでに何十回、何百回、何千回と繰り返したこの言葉は、記憶がはつきりしだした当時の僕の支えだった。

まあ、レナやセルジュ、村の皆が居る今はただの口ぐせのようなものになってしまったけれど

それで構わない。

かつての僕はそうしなければ自分を保てなかった。でも今は彼女たちがいるのだ。

自分を肯定してくれる存在がある。

それは（少なくとも僕にとっては）この世の中で最も幸せなことだと言えるだろう。

だからこそ僕は、彼女たちを、自分の居場所を守るためならなんでもする。

彼女たちを脅かすモノが現れたなら、目が覚めた時から片時も離さずにいる、この虹色に輝く刀（虹、と名付けた）を以って排除する。

とまあ、こんな物騒なことを考えているわけだけど、幸いにもその機会は未だ訪れてはおらず、平穏で幸せな日々を送ることができているのだ。

これは、そんな平和な日常の終わりを告げる話。

漁に使うための網を修繕する作業をようやく終え、辺りを見渡す。そこには、ある人の人生の軌跡があった。

ライオンザメにノコギリカブリ、ギロチンガメに六角クジラ。その他にも、捕らえようとすれば一筋縄ではいかない程苦勞するであろう生き物たちの剥製が並んでいる。

そこでは、室内に居ながら自然の雄大きを感じる事ができた。いくら眺めていても飽きは来ないだろう。そんな風に少し考え込んでいると、階段を降りてくる音が聞こえた。

「ん、なんだセルジュか」

それに、この作業場の主人が反応して声をかけた。

「こんにちわ。こつちにシユウが来てるって聞いたんだけど居る？」

なんだ、僕を迎えに来たのか。

さて、どんな文句を言ってやろうかな……。

「ほれ、そこで作業してるぞ」

「やあ、おそよう」

その言葉に合わせて寝坊助に手を振ってやる。

どうやら僕がそれほど怒ってないと思っただけ、随分とホツとした顔だった。甘いなあ。

けれど既にレナに絞られているだろうし、少しは手加減してあげようかな。

「シユウ、作業つてもう終わってる？」

「ああ、初めにいいつかった分は終わってるよ。まだ何かあるかもしれないけど」

と言いつつ主人の方を見ると、

「ハハハ、いや最初に頼んだ分で本当に終わりだよ。お疲れ様、シユウが手伝ってくれたおかげでだいぶ早く終わったよ。なんだ、今から二人でデートでもするのかい？ 若いっていいもんだねえ！」

などと茶化してはいるけど、僕の方から今日のこの後の予定は話してあるので単純にセルジュをからかいたかったのだろう。実際彼は

あたふたしながら否定している。

「そうだ、いいこと(あくまで僕にとってであるが)を思いついた。そうと決まれば早速……。」

「……セルジュは、私とデートするのは嫌なの?」

と、少し拗ねたような口調と上目遣いのコンビネーションで攻撃してやる。普段使わない『私』という一人称と女の子らしい言葉もセツトだ。

「え、ええっ!?!いや、別に嫌とかそういうわけじゃ……。」

効果は靦面だったようだ。ふふ、そろそろネタバラシといこうか。それに、ほどほどにしておかないと後が怖いからね。怖いのはセルジュではなく、レナなんだけど。

「冗談だよ。少しからかっただけさ。……さて、君がのんきに眠っている間に仕事は終わらせてしまったし、早速トカゲ岩に行こうじゃないか」

「ウロコ獲りだったっけか?」

「うん、ボク達いまからトカゲのウロコを取りに行くんだ」

「懐かしいねえ。よし、その道の先達である俺がアドバイスしてやろうじゃないか」

これは願っても無い。あいつらはかなりすばしっこいと聞くしどうやって捕まえるかまだ案はでてなかったからね。

セルジュもそう思ったみたいで、ぜひお願いします!なんていってゐるし。

「よおし、それじゃ耳の穴かっぽじってよく聞けよ?」

【明日の為にその1:そこにあるものを利用しろ!】

【明日の為にその2:地形を考えてうまく使え!】

【明日の為にその3:追いかけてここが好きなら奴もいる!】

つと、こんなもんかな。ま、実は親父の受け売りなんだけどさ。どうだい、役に立ちそうか?」

言ってることは正しいんだろうけど、なんだかこう妙に……、まあいいか。

「アドバイスありがとうございます。それじゃあボク達はこれで」

「ああ、気を付けてな。最近でかいのを見たって噂もあるし。まあただの噂だが」

兎にも角にも、こうして僕たちはトカゲ岩に向かうのだった。

閑話休題

トカゲ岩にやって来た僕たちは、彼のアドバイスに従ってトカゲを捕まえ、ようやく二枚のウロコを手に入れたところだった。

え？一匹からたくさん取ればいいのにつて？いや違うんだよねこれが。トカゲのウロコ全部が綺麗なわけじゃないんだ。だから一匹からは一枚しかとらないって決めてるのさ。自分の中で、ではあるけどね。

そうこうしているうちに、三匹目のコドモ大トカゲ（ウロコを持つてるトカゲの正式な名前）を発見した。

「よし、あいつから最後の一枚をもらおう」

セルジュと頷きあうと、ちょうど円形になっている地形の左右から挟み撃ちにする形でトカゲを追い詰めていき、

「よっ」

あつさりと捕まえることができた。

さて、少し痛いだろうけど我慢してくれよ。

心の内で謝りながらウロコを剥がす。

すると、今まで聞いたことのないような大声で鳴き始めた。

「な、なに!?!」

セルジュも僕も驚いてトカゲを離してしまう。すると、トカゲは一目散に走って行き、それと同時に地響きが聞こえてきた。

「えっと、もしかしなくてもあれだね。噂になってるっていう大きいやつだよね?」

恐る恐る辺りを見渡すと……居た。

ちよつと待て、あんまり大きすぎないかい？

「アレがああなるか普通!?!」

セルジュの心からの叫びが虚しく響く。

「どうやらあいつはひどくご立腹らしい。それも当然か。最近村ではウロコが人気でウロコを取り過ぎたんだ。」

「けど、それに文句を言っている暇は無い。何とかしなければなんとかされてしまうのだから、戦うしかない。」

「くるぞー！」

自分に活を入れ、虹の柄に手を掛ける。

セルジユは船を漕ぐパドルを改造した、スワローを構える。

「ふっー！」

大トカゲは幸いにもその図体に見合った素早さしか無いようで、攻撃をかわしながら何度か斬りつける。

「挟み撃ちだー！」

その言葉と共にセルジユはトカゲの死角に回る。

「ほら、こっちだー！」

トカゲの意識をそっちに向けさせないように大声を出して牽制をする。その目論見は成功し、トカゲは再びこちらを見る。が、それだけでは終わらず、大きく息を吸い込んだかと思うと広範囲に水のブレスを吐き出した。

「うぐっ!?!」

ギリギリのところまでそれを躲し、もう一度鼻先に斬りつける。……そろそろ溜まったか。目の端でグリッドを見て、パワーレベルが上がっていることを確認する。

「シユウー！ こっちはいつでもいけるよー！」

セルジユも準備は整ったようだ。さあ、決めるぞー！

「セルジユー！」

トカゲの大振りな攻撃をかわしつつそう叫び、グリッドに配置してあるエレメント：ファイアボールに触れる。すると、体が赤い光に包まれ、目の前に大きな火の玉が現れた。

「行けっー！」

その火の玉をトカゲの顔に叩き込む。

ほぼ同じタイミングでセルジユも背後からファイアボールを撃つた。どうやらセルジユもこいつの弱点属性に気付いていたみたいだ。

「グオオオオアア！」

さすがに堪えたようで、大トカゲは悲鳴を上げて逃げ帰って行った。

「おわったあ……」

安心感からか、体中の力が抜けて行く。

二人してふらふらになりながらなんとかトカゲ岩を抜けて、オパーサの浜にたどり着いたと同時に砂浜に倒れこんだ。

「はあ……、疲れたあ」

座り直してセルジュを見ると、まだ寝転がったままだった。情けないなあ、エレメント一つ撃っただけだろう。

「いやいや、あいつ思いつき尻尾を振り回してくるもんだから近づくのも大変だったんだって。そりゃシユウ程じゃないだろうけど、いいじゃないか。シユウは強いんだから」

「僕は強くなんかないさ。まだまだだよ」

「なに言ってるんのか、村長とまともに打ち合えるのは村じゃシユウだけなんだよ？」

その言葉に僕が答えようとするよりも早く、

「あら、わたしはセルジュも結構いい線いけると思うんだけど」

と声をして、そつちを見るとレナが浜にやってきたところだった。

「遅くなってごめんなさい。待たせちゃったかな？」

「そんなことはないよ、僕たちも今来たところ」

「ああ、そうそう……、ハイこれ、頼まれてたウロコ」

そう言っつてセルジュがウロコをレナに渡す。

「うんうん、ちゃんと集めてくれたのね！これなら綺麗なネックレスをつくれるわ！ありがとうセルジュ、シユウ！」

「喜んでくれるなら苦労した甲斐があつたよ」

「うん、ボクが寝坊しちやつたせいで用事が増えちやつたみたいだし、これくらいいけないよ」

僕達のその言葉に、レナは薄く微笑むと、僕達の間座り込んで話し始める。

「久しぶりだなあ、こーい」。

昔は三人でよく遊びに来てたっけ。

なんでも出来るシユウも泳ぐのだけは苦手で、わたしとセルジユに、泳ぎ方を教えてくれー、なんて泣きついてきたこともあったわよね」

「なっ、そ、それは忘れるって約束だったじゃないか……！」

恥ずかしい記憶を呼び起こされて、顔が真っ赤になるのが分かる。

「ふふっ、ごめんごめん。でも、なんか思い出しちゃってさ。つい口に出しちゃってた」

「でも、最初こそ上手く泳げなかったけど、教えたらすぐに上達したじゃないか、今じゃボク達よりもずっと速く泳げるでしょ？」

「それは、そうだけど……、恥ずかしいものは恥ずかしいじゃないか」

「そーお？そういうエピソードがあるのって、可愛らしくて良いと思っただけだなあー」

なんて言っつて、にへーつと笑うレナに毒気を抜かれて苦笑いを返す。

「まったく、レナには敵わないね」

レナを挟んだ向こう側でセルジユが何度も首を縦に振っているのを見て、笑ってしまった。彼も怖いもの知らずだね。すぐ隣で気付かないなんて。

それからしばらく、僕達は昔のことを思い出しては話し合っていた。

「変わらないね、海は……。」

それまでとは色の違うレナの声に、不意にしんとなる。

「わたし達が生まれるずっと前からこうして、よせてはひいて……。」

気が遠くなるくらいのがい、ながい時間。

たくさんのものを見て、たくさんの声を聞いて。

わたし達がいなくなった後もきつと何一つ変わらない。よせてはひいて、ひいてはよせて……。」

そこで一度口を閉ざしたレナに、何か声をかけようかと思った時、

レナは再び口を開いてこう続けた。

「ねえ、セルジュ、シユウ。」

今日、こうしてここに来て、昔にあったことたくさん思い出したでしょう？

あの日の約束のことも、覚えててくれたでしょう？

わたし、それがすごく嬉しかったの。

不思議よね、思い出って……。

もうすっかり忘れてたと思ってたのに、胸の奥からいきなり浮かび上がって来るんだもん。「アトロポス……」

じっと、待つてるんだね。ちよつとしたきっかけで思い出してもらえる、その時が来るまで……。」

「そう、今のこの瞬間だって、いつかふと思い出したりする時が来るのかも。「アトロポス……」

10年、20年たって、わたし達が大人になって、結婚して、子供ができて……、そんなある日、ふとね……。

その時わたし達、どんな大人になってるんだろう。

どんな生き方してるんだろう……。」

レナの話を聞いて、少し考えてしまった。僕は何年か経った未来で、どうなっているのだろうか。「アトロポス……」彼女達と共に笑いあえている未来を望んでもいいのだろうか、と。

「ボク達、こうして今日ここでいろんなことを思い出して、話して、笑ったでしょ？だから、今日の日のことだって、思い出だ、いつまでだって、覚えてるさ」

ああ、ごめんよセルジュ、君の渾身のセリフ、半分も聞き取れなかったや。でも、レナがあんなに嬉しそうだし、まあ、いいか。さつきから頭の中に声が響いて、どうしようもないんだ。ちよつと、休ませてくれると、いいんだけど……。

「うん……。」

そうだといいよね、ほんとうに……」

「アトロポス」

「ねえ、セルジュ。」

わたしほんっ……………」

「ぼくのなまえは、シユウ、だ……………」

辛うじて繋がっていた意識が、そこで途切れた。